

G.A. スチュワート 編  
中野尊正 訳編

地域の計量と評価

石水照雄・奥野隆史 編

計量地理学

最近、計画手法やテクノロジー アセスメントなどで、メッシュ・アナリシスのような計量化された地域の情報が注目されるようになった。上掲の書物はいずれも論文形式で書かれていて、各章各節が独立しているので、内容的には不十分ではあるが、土木工学以外の分野での傾向を知るニュース的な書として紹介したい。

「地域の計量と評価」(Land Evaluation)

本書はオーストラリアのキャンベラ市で行われた UNESCO 協賛のシンポジウム(1968年8月26~31日)の論文集の訳本である。内容はシンポジウムに関する報告(1編)を除いて、大きく5部に分かれている。すなわち、1. 土地分類の評価と原理(収録論文3編)、2. 土地評価の論評と事例研究(7編)、3. データの処理と解釈(5編)、4. ランド・パラメーター(5編)、5. ランド・パラメーターのためのセンサー(探査装置)(5編)、の計26編から成っている。開催国の関係からか大半が英語圏の国(オーストラリア14編・イギリス3編・カナダ2編・アメリカ合衆国4編・ソビエト3編)のものである。土地評価は土地利用を可能にするための地域の査定であり、最初の2章ではそのための土地分類の概念とその方法の一般論と事例が述べてある。3章は、図形の自動判読やコンピューターの利用、4章では地形の数量化や河川流量の地域分類指標としての評価、降雨-流出モデル、気象資料(蒸発量)、土の水分の土質学的性質なども地域の特性を表わすものとして扱われている。5章では、レーダー、空中写真、宇宙写真、赤外線の利用などのほか、分光計を用いたスペクトル・ルミネランスの測定による砂漠の地質学的調査、温度や水分などの遠隔測定による植被の程度や土壌水分の濃淡の評価に関する報告がある。

広大な土地を概括的に評価する手段やその意図についてはわかるが、本としては、内容的にまとまっているとはいえない。また、いかにも訳本らしく文章が難解であるが、最後の中野氏による解説が、わずかにそれを補っている。

「計量地理学」

「計量的手法による理論体系の開発を意図する新しい潮流である」と本書にも述べられているように、計量地理学とは地域の計量化とモデル化を目的とした地理学の一分野であるが、ここで用いられている計量的手法は、地理学独自のものではなく、既存の統計理論、確率過程理論を応用して「空間秩序」を計量的に解明しようとするものである。本書では、地理学者がそれらの手法をいかに利用しているかをうかがうことができる。内容は、序論で計量地理学の解説がなされ、1. 地表事象の空間的規則性(4編)(都市の規模・配置の法則や水系網の規則性、農業の生産性評価への重回帰分析の応用など)、2. 地表事象の空間構造(5編)(グラビティー・モデル、経済人口モデル、都市機能の解釈への多変量解析の応用など)、3. 地表事象の空間的過程(2編)(マルコフ連鎖、拡散過程の応用)となっている。

計量化する方法やその結果が、どのような価値を持ちいかに実際の計画実施の段階で利用されるかということとは定かではないが、こうした手法が開発され、急速に普及している事実に注目したい。 [に]

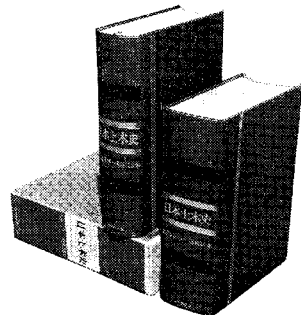
(地域の計量と評価) 鹿島出版刊, A5判・478ページ, 定価 4100円, 昭和48年8月9日受付。  
(計量地理学) 共立出版刊, A5判・265ページ, 定価 1900円, 昭和48年7月9日受付。

● 内容見本送呈 ●

日本土木史

大正14年「明治工業史・全10巻」(日本工学会), 昭和11年「明治以前日本土木史」(土木学会・岩波書店), 昭和40年「日本土木史・大正元年~昭和15年」そして今回ついに昭和16年~昭和40年完成。有史以来の日本土木史が一応全部つながったことになる記念すべき出版。 <好評発売中>

大正元年~  
昭和15年  
24 000 円  
昭和16年~  
昭和40年  
36 000 円



丸善および全国の主要書店へご注文下さるか学会へ直接お申込み下さい。